井上円了と森田正馬

森田療法成立への貢献

中山和彦 *nakayama kazuhiko*

はじめに

森田療法の成立を探索することは、自然に森田理論をその源流から理解することになる。そのためには当時の精神医学的状況、文化的関わりなどに注目する必要がある。その方法として森田療法の成立に大きな影響を及ぼした人物として、筆者は以前より次の５人に注目してきた。それは森田理論の基礎の形成に関与した井上円了(1)、森田療法を世に輩出する原動力となった中村古峡(2)と杉村楚人冠(3)、そして森田療法の発展に寄与した佐藤政治(4)、宇佐玄雄である。そのなかで本稿では井上円了に注目する。

森田療法の成立に、井上円了の「妖怪学講義」(5)や「心理療法」(6)が大きな影響を及ぼしているという記載は、円了の研究家でもある板倉聖宣(7, 8, 9)や恩田彰(10)らの解説書にみられる。これは森田療法研究家であった慈恵医大の野村章恒による、森田正馬評伝(11)の中の記載が主な根拠となっている。そのわりには、現在の森田療法の研究者の中で、このことはあまり知られていない。円了は心理療法にとどまらず、精神医学の基礎に関する多大な業績を残している。しかし井上円了は医学者ではなく哲学者であり、特に後半の活動領域が主に学校教育や社会教育に移っていったため、その偉大な業績が紹介されることは今まで少なかった。

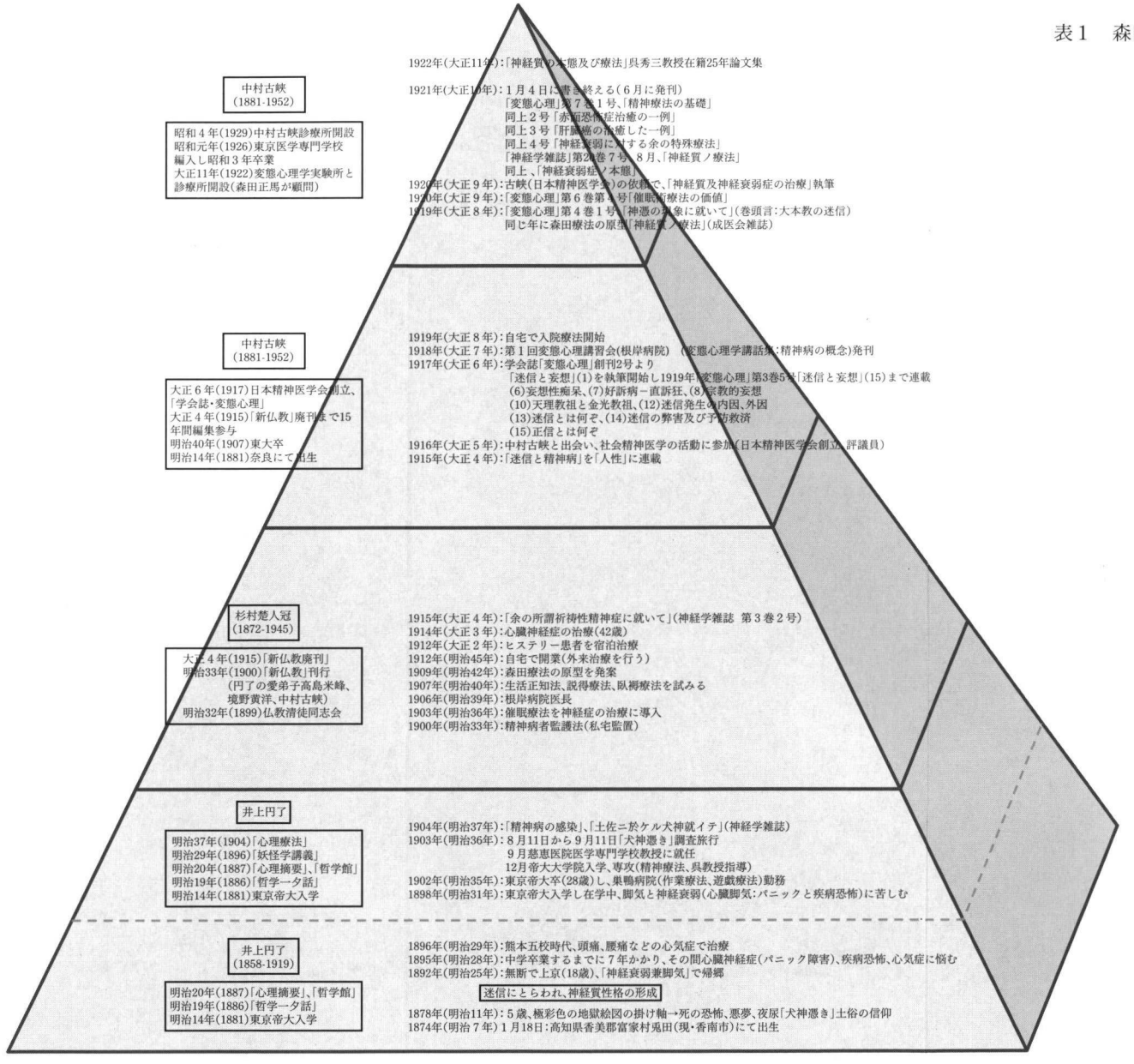
そこで本稿では森田正馬が中学、高校学校時代、また巣鴨、根岸時代

写真1　井上 円了（1858－1919）

に渡って愛読したと言われる井上円了の「哲学一夕話」（てつがくいっせきわ）（明治19年）[12]や「心理摘要」（明治20年）[13]、「妖怪学講義」（明治29年）、「心理療法」（明治37年）が、森田療法成立の過程にどのようにかかわっているかについて論ずることにした。写真1は円了が2回目のヨーロッパ視察に行った、明治36年45歳頃のものである。

森田が注目したのは「ひとの存在」に自然に伴う「不安」であった。この普遍的テーマを対象とした精神療法が、なぜあの時代に生まれたのだろうか。また必要だったのだろうか。大きなヒントは森田の最初の本格的な論文である、「土佐ニ於ケル犬神ニ就イテ」にある。またその10年後には「余の所謂祈祷性精神症」を発表し、森田の執筆活動は急激に増加し、大きく変化していく。それをふまえて森田理論の完成とその実証、そして森田療法を世に輩出し、さらに展開していった流れとを、4つの時期に区分してみることにした。（表1）　まず森田療法完成に至る1期から2期を第Ⅰ章とし、完成直前の3期から4期を第Ⅱ章とした。そして最後に第Ⅲ章として若干の考察を加えた[14, 15]。

表１　森田療法の成立過程



第Ⅰ章：森田正馬と井上円了の明治を舞台にした系譜

1．神経質性格の形成 （第Ⅰ期その1：表1）

1874年（明治7年）1月18日、高知県香美郡富家村兎田（現・香南市）にて森田正馬（幼名：光）は出生した。森田の神経質性格の由来は、5歳から10歳の頃、お寺で見た極彩色の地獄絵図の掛け軸の印象がもとであるといわれている。そのため死に対する恐怖心、悪夢、不眠となり、夜尿もなかなか直らなかったという。また中学になって、奇蹟、迷信に興味を持ち、骨相、人相、易占いに熱中していたことは有名である。

しかし地獄絵を見ただけで、迷信に取り込まれ神経質性格が形成されるだろうか。森田の母亀女は、33歳時にうつ状態、43歳時に心気症の既往がある。後に森田自身が述べているように、神経質性格は先天的な素因も関わっているだろう。筆者は森田の生育環境にもうひとつの迷信にとらわれる原因となった要因があったと考えている。それは土佐における根強い「犬神憑き」土俗信仰である。「犬神持ちの家の箪笥、床下などにいる犬神に憑かれると胸痛、手足のけいれん、また犬のように吠えたりする。犬神は、その子孫にも追って離れることなく、その家系との婚縁を交わることできず、社交上孤立の境遇に陥る」。この記載は森田療法の成立に大きく関わった井上円了の「妖怪学講義」（明治29年）によるものである。この土俗信仰は、その憑依現象（人格交代）や心身の錯乱、苦悶状態の驚異から恐れられていたが、その様相は幼少の森田には極彩色の地獄絵よりも恐怖体験になっていたのではないだろうか。土佐では犬神に憑かれることを恐れ、名前に動物を意味する字を用いることが多かったという。森田の「正馬」、母の「亀女」、父の幼名「馬三郎」、母の妹「虎女」父の妹「鹿」、妻の「久亥」を考えると、森田家自

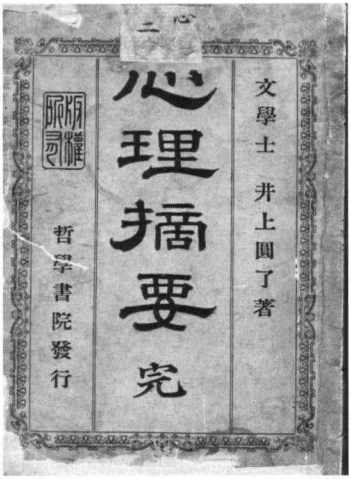


写真2　井上円了による「心理摘要」(明治20年：1887)

体がこの土俗信仰を恐れていたのではないか、またその根強さが伺えしれるところである。余談であるが坂本龍馬も、しかりである。

森田は1895年（明治28年）中学を卒業するまでに7年かかった。それは心臓神経症（パニック障害）、疾病恐怖、心気症に悩まされていたことが原因であった。その間無断で上京（18歳）した折、「神経衰弱兼脚気」という診断で帰郷したという。そのころから、学業より、「広く雑学を読み、心理、論理、哲学書を好んで読んだ」（森田日記より）、事実前出の井上円了の書いた「哲学一夕話」や「心理摘要」が、愛読書であったといわれている（写真2）。1896年（明治29年）、熊本五校時代、頭痛、腰痛などの心気症で治療しているが、その年に円了の「妖怪学講義」が発行されている。そこには全国にみられる犬神、狐憑き、数々の迷信、邪教などをとりあげ、自然科学や心理学によってそれを解説してある。易者になるのではないかと心配されていたほど「迷信にとらわれ」ていた森田は、円了の本のお陰で、その「とらわれ」からは解放された。

しかし、大学に入学してからも脚気と神経衰弱（心臓脚気、パニック発作と疾病恐怖）に悩まされ続ける。症状からは解放されなかったのだ。理論的な解釈と症状の消失とは別であることに身をもって体験したのである。

2．神経質性格との決別に必要だったこと
—井上円了著「心理療法」との出会い （第Ⅰ期その2：表1）

1902年（明治35年）：東京帝大を卒業（28歳）し、12月大学院入学、専攻を精神療法（呉教授指導）とする。その翌年の8月11日から9月11日、「犬神憑き」調査のため、故郷である高知に出かける。この足早な行動は、もともと自分の神経質性格に大きく影響を及ぼした「犬神憑き」による「とらわれ」体験からの決別、また自分自身の神経質性格からの決別のために必要であったのではないか、だから卒業間もないにも関わらず、駆り立てられて行動しているように思える。

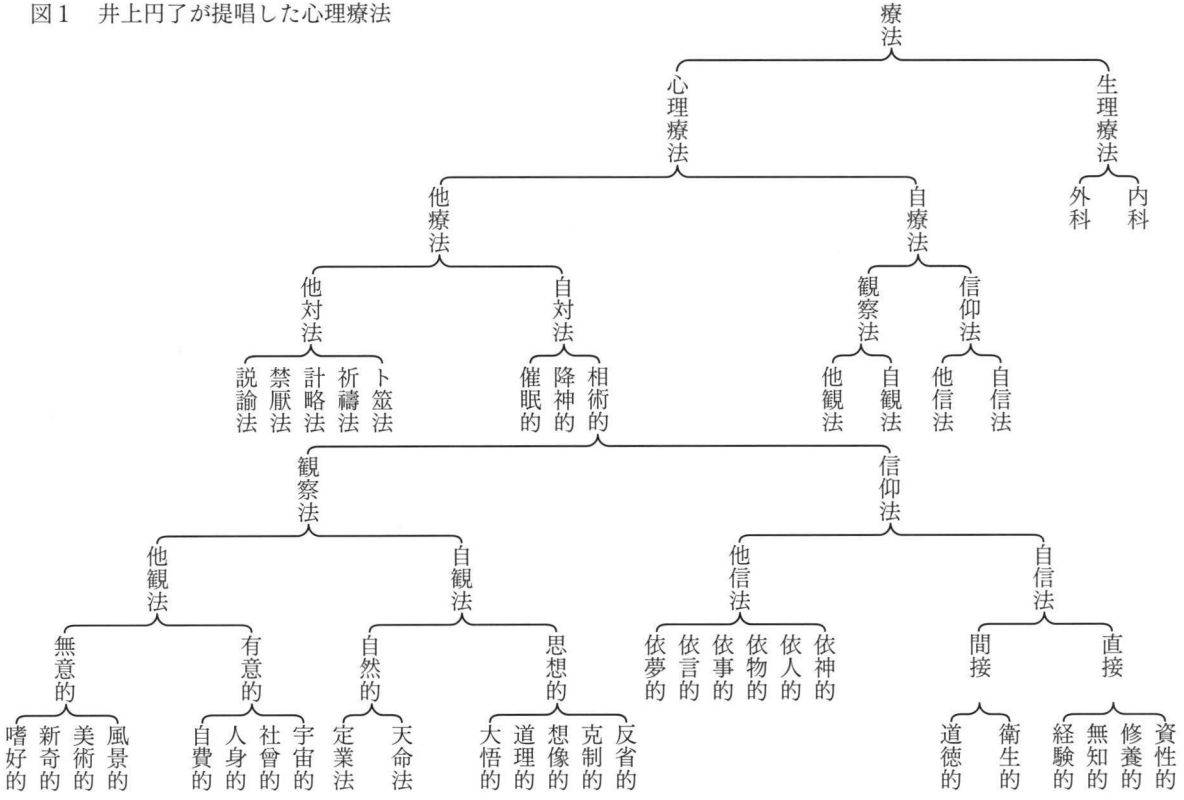
そして1904年（明治37年）に「精神病の感染」、「土佐ニ於ケル犬神就イテ」を神経学雑誌に発表する。この論文には非常に重要なポイントがあった。特に36例（女31例、男5例）の憑依患者を診察しているが、そのうち、4例の犬神憑依状態は催眠術によって同様の状態を引き起こすことができると記載している点である。このことは森田にとって長く引きずる問題提起となった（後述）。

1）心理療法と生理療法

1904年（明治37年）、森田が熟読し、終生参考にした、円了の最も熟した名著である日本初の「心理療法」、が発刊されている。明治20年の「妖怪学講義」の医学部門で、すでに心理療法の体系があらわにされているが、「心理療法」（写真3）では積極的に治療法として打ち出している（図1）。『一切の疾患は、心

写真3　井上円了による日本初の著書「心理療法」（明治37年：1904）

図1　井上円了が提唱した心理療法



身相関の上に現れるが、その原因は身体から生じるものと心から生じるものがある。・・身体からの治療を生理療法、心のほうからの治療を「心的療法」、「心理療法」という・・。心理療法の我が国最初の名付け親ともいえる。またこの時代、心身相関の考え方を指摘したことは驚異的な功績である。

2）自療法と他療法　（図1）

円了は心理療法には自療法と他療法があるとした。その他療法のなかに催眠法をあげていることも注目すべきことである。

3）信仰法と観察法　（図1）

自療法を信仰法と観察法に分けている。そのうち信仰法には自信法と他信法があると述べている。この自信法とは、自らこの病気は治ると信じることしている。さらに、他信法は神仏を信ずることで病気が治ると信じることだと述べている。

4）自観法と他観法　（図1）

図1に示した観察法の分類が、円了の最も偉大な業績の一つといえる。すなわち、観察法は自観法と他観法があるとしている。自観法は、自己が体験する事実を観察する方法で、さらに思想（人為）的自観法と自然的自観法に分けている。その思想（人為）的自観法は「自己の心を反省して種々の観念を作るが、自己の心を統制していく」ものである。また自然的自観法とは、「人の生死や疾患は、人間の力ではどうにもならないものと悟り、自然に、任せる」という方法である。円了のいうこの自然療法、特に自然的自観法の考え方は、森田療法の「あるがまま」に受容するという考えと共通するものがあることがわかる。またこれは森田療法のみならず、内観療法の源流を思わせる記載である。このようにに後に森田が考案する、独自の精神療法の基盤が認められるが、この時点ではまだ、その思案があったわけではない。

森田は「犬神憑き」が精神医学的に重要な研究対象であることを、円

了の「妖怪学講義」によって知った。「心理療法」を基盤に、18年後の1922年（大正11年）に、森田生涯のゴールである「神経質の本態及び療法」と「精神療法講義」が完成する。この両方の本の引用文献の中に井上円了の本を掲載している。このように「祈祷性精神症（病）」から「森田療法成立」に至る長い間、一貫して円了から大きな影響を受けていたことがわかる。

3．催眠療法に熱中し、醒めていく、この10年間の意義（第Ⅱ期：表1）

森田の生きた明治から大正時代は、ドイツ医学が主流であった日本の医学が大きな進歩を遂げた時期である。しかし精神医学領域はどうであっただろう。本格的な精神障害に対して有用な薬物もなく、しかも昭和まで続く明治33年「精神病者監護法」によって公認された私宅監置、すなわち「座敷牢」の時代であった。精神病院では閉鎖病棟での悲惨な隔離のみの対応であった。当時の精神病院の状況を克明に記述した小説、中村古峡の「殻」からもその悲惨さが伝わってくる。その一方で神経症領域の治療は催眠療法が主流であった。

心の問題についてはまだ多くの非科学的な迷信、邪教がはびこっていた時代でもある。また科学的根拠にもとづく新しい医学が導入されてきた時代に、森田療法の姿は物質療法や理論的な精神療法とは異なっていた。一見、時代を逆行しているような民間療法の姿と似ていて、正しく理解されない可能性があった。そのような森田療法を世に出すためには、非科学的な迷信や邪教とは違うことを証明する必要があったのである。

森田の最初の本格的な論文は、「土佐ニ於ケル犬神ニ就イテ」（1904年神経学雑誌）であった。その後10年の年月を費やして我が国で最初に、憑依状態、祈祷性精神症について報告した（1915年、大正4年）。森田療法完成以前から成熟期さらには森田を公私問わず支えてきた佐藤

政治の学位論文も「祈祷性精神症の研究」であった。森田療法の完成、その実証、そして発表するその前において先行した「祈祷性精神症」の研究の意義は何だったのか。これらの疑問を解くために、この10年間の森田の足跡を検証することにした。

1）催眠術療法の有用性と限界

1904年の「土佐ニ於ケル犬神ニ就イテ」、「精神病の感染」から1915年の「余の所謂祈祷性精神症に就いて」までの約10年間は、催眠術には森田は大いに熱中し、その効用も体験している。催眠術によって治療した症例を軸にした講演も繰り返している。しかしその一方で、1912年、ヒステリー患者を宿泊させて治癒させたり、1912年心臓神経症を一回の面接で治癒させたり、催眠術を使用しないで治療効果がある症例を体験していた。

そのようななかで催眠術の治療としてのあり方にも疑問を感じていた。1904年の「土佐に於ける犬神に就いて」でも述べているように、36例中4例において祈祷師に行為によって生じる憑依状態は、催眠術によっても再現できることに気づき、問題を感じていたと思われる。すなわち、催眠術を神経症治療に用いることは、見方によっては精神療法家が祈祷師と同等に役割を果たしていることにもなる。森田は暗示でも、説得でも、催眠でもない新しい精神療法を編み出す必要性を感じ取っていたのだ。

森田理論の基礎、術式の構想は、1907年の論文「神経衰弱性精神病性体質」に読み取れる。その要旨は次のようである。「神経衰弱症の特徴として、刺激に対する過敏性、疲労性の亢進していること、偶然の体験を自己暗示によって症状化していること、さらにこのような性質は先天的体質のみでなく、遺伝的素質、幼少時の成育環境、および疾病体験や心的外傷によって形成されると述べている。また症状により、ヒステ

リー性、抑うつ性、痴鈍性、強迫観念性、及びヒポコンドリー性に分類している。この論文を読むと、この時点で森田理論がほぼ出来上がっているように思える。

しかし、森田療法は実践的療法、自然療法であったため、民間療法として認識され、科学的に受け入れらない可能性は大いにあった。すなわち森田療法を世に輩出するためには、「土佐に於ける犬神に就いて」のような調査報告ではなく、「祈祷性精神症」を確立して、最終的には「催眠療法」と決別、放棄が必要であったのである。

2）人道主義の社会精神医学の誕生―井上円了の果たした役割

森田正馬が中学、高等学校時代、また巣鴨、根岸時代に渡って愛読したと言われる「哲学一夕話」や「心理摘要」、「心理療法」を書いたのは本稿の主人公である井上円了である。

井上円了は1858年、安政5年に新潟で真宗大谷派慈光寺（しんしゅう・おおたには・じこうじ）の長男として生まれた。彼は新潟学校第一分校（旧長岡洋学校）で学び、明治10年、19歳で教団の次世代を担う人材を養成するために京都東本願寺の教師学校に推薦され入学した。同じ明治10年に東京大学が設立され、東本願寺は円了を国内留学生として、東京大学入学を命じた。しかし当時東大ではすべて授業は英語で行われていたため、3年間予備校で英語を学び、明治14年に文学部哲学科のただ一人の新入生として入学した。そこで東洋哲学、インド哲学、また円了がもっとも興味を持った西洋哲学に触れ、彼は「洋の東西を問わず、真理は哲学にあり」という新たな確信に到達するのである。在学中に友人と哲学研究会をつくり、明治17年には井上哲治郎や有賀長雄らとともに、哲学会を発足した。当時世襲制の真宗教団では長男が住職を継ぐのが決まりであったにも関わらず、東大哲学科を卒業後「諸学の基礎は哲学にあり」という信念のもとに明治20年、29歳の若さで現東

洋大学の前身である哲学館を創立したのである。それを前後して「不思議研究会」、「妖怪研究会」（明治23年）を発足、当時出版された「哲学一夕話」(8)や「心理摘要」(9)は当時18歳であった森田正馬を含む医学や心理学および哲学を志す多くの人々が、これらの本によって啓発され、目を開かれた人が多かったという。

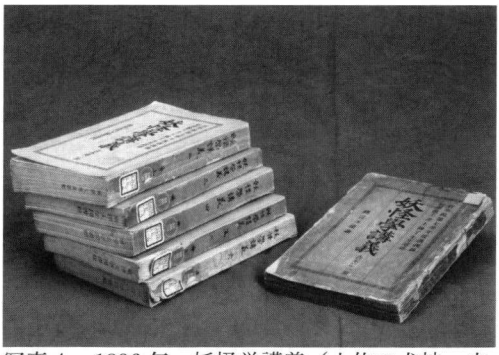


写真4　1896年　妖怪学講義（土佐の犬神、山陰の憑き物などの記載がある）

明治20年哲学館開講以来、最も力を入れた妖怪学講義録をまとめた「妖怪学講義」(1)が明治29年に出版された。写真4はその初版の写真である。妖怪学とは今では突飛な表現であるが、井上によると「当時の世の中にはびこる妖怪、迷信を取り除く必要から、一見、特殊で珍しい、また異常な現象を、自然科学や心理学を通して研究する」ものであった。そのために全国巡講を経て、迷信打破のため地方に伝わる天狗、犬神、予言、妖怪などを調べた。そのことで後に「妖怪博士」の異名をとることになったのである。

「妖怪学講義」は総論、医学部門、哲学部門、心理学部門、宗教学部門など8部門に分けられており、かなり当時として学問的に整理されているのに驚かされる。その中で、医学部門では、精神病を、心理学部門では夢、憑依、狐憑きなどを扱っている。また円了はすでにこの本の中で「心理療法」の意義と必要性を強調している。さらに心理療法の一つとして、禅が心を広く大きくするのに役立つと述べている。

その理念に基づく円了の活動は明治20年から30年頃のことであっ

たが、その集大成として明治37年に日本初の「心理療法」（写真3）としてまとめたのである。

また円了は東洋大学哲学科の講義に当初より心理学、医学講座を導入していたことも驚きの事実である。森田は呉秀三教授の紹介で大正13年から昭和3年まで、同大学の教育病理学、生理学、衛生学の教授として関わっている。

その理念を受け継いだのが中村古峡であった。この人物について、ある程度の背景を知っておくことはその時代の円了の功績をさらに理解することになるので、ここでまとめておく。

中村古峡の父親は神官であったが、子供の頃から浄土真宗のお寺に行き「坊さん」になりたかった。京都で杉村楚人冠と出会い、上京後、楚人冠と井上円了の弟子である境野黄洋、高島米峰らが1899年結成した仏教清教徒同志会に参加、「新仏教」の創刊、編集に深く関わった（写真5）。「新仏教」の活動は「一切迷信の打破」を期して近代的、合理的姿勢を貫くものであった。古峡は旧習や迷信、邪教を科学的な光を当てることで徹底的に排除するという綱領を学んだ。井上円了も創刊号に祝いの文章を載せている。「新仏教」が1915年に廃刊となり、それを継続するかのように1917年古峡は日本精神医学会を組織し、「変態心理」

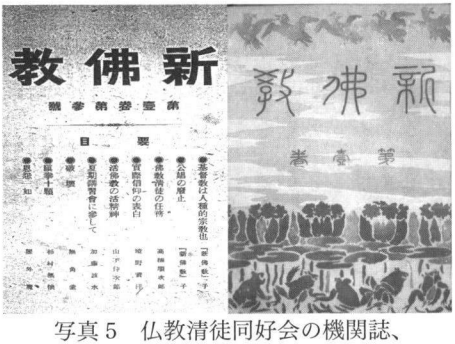


写真5　仏教清徒同好会の機関誌、「新仏教」

写真6　日本精神医学会の学会誌、「変態心理」

を創刊した（写真６）。賛助者として井上円了、杉村楚人冠、森田正馬、境野黄洋、井上哲治郎、佐藤政治がいることに注目したい。この活動は「一切迷信と妄想の打破」と「自由研究」であった。当時勢力を拡大してきた「大本教」をはじめとする邪教撲滅、催眠術から展開したオカルト、超常現象研究を批判した。当時『変態心理』の役割は、留まるところを知らず、異常心理学の立場で、より科学的な研究発表の舞台として重要であった。

第Ⅱ章．円了の志を継いだ「迷信と邪教の廃絶」運動
―森田療法を輩出するためのエネルギー源となった

1．森田療法輩出前の覚悟「催眠療法の限界・放棄」（第Ⅲ期：表1）

１）「変態心理」にみる森田療法成立への道

折もおり、中村古峡が邪教、迷信打破のため、日本精神医学会を設立する前の年、1916年（大正５年）に森田は、古峡に出会う。森田はその社会精神医学活動に賛同し、「新仏教」を受け継いだ、学会誌「変態心理」に第１巻第２号より、「迷信と妄想」と題した論文を15回にわたり連載している。これは1915年（大正４年）に森田理論の旗揚げ論文として1909年に発表して『人性』に「迷信と精神病」を連載していたが、その継作品とも言える。森田にとって「変態心理」は自由な研究の発表の恰好の舞台であった。森田は1915年（大正５年）に祈祷性精神病を発表しているが、それに留まらず、中村古峡とともに当時蔓延していたオカルト、大本教、超心理学、心霊学の問題を抽出して宗教精神医学を立ち上げたのである。これは円了が全国を行脚して「一切迷信の打破」のため全国を行脚した志を受け継いだものといえる。

15回の連載の内容は、（１）から（５）は「迷信と妄想」でそれ以後（６）妄想性痴呆、（７）好訴病－直訴狂、（８）宗教的妄想（10）天理

教祖と金光教祖、(12) 迷信発生の内因、外因 (13) 迷信とは何ぞ、(14) 迷信の弊害及び予防救済 (15) 正信とは何ぞ、であり自宅で入院療法を開始し、森田療法成立といわれている 1919 年まで連載している。

この精力的な執筆活動によって森田は催眠療法との完全放棄、決別を行うことができた。同時に、森田理論の原型となる神経症の症状形成と術式の創案に導かれ、それを実証する勇気と自信を得たのである。またそれは 1918 年 (大正 8 年)、根岸病院で行なわれた中村古峡主催の第 1 回変態心理講習会の講演をまとめた変態心理学講話集のなかにある「精神病の概念」にも現れている。精神病の定義を明確にし、そのなかで心身相関において、腕の拮抗筋が互いに調和して自然な動きをすることを用いて説明している。森田療法の骨子にある「自然な調和」が読み取れる著書である。

2) 円了の全国巡講にみる森田療法の源流

催眠療法は神経症の治療のほかに、透視、念写、心霊学といった方向の発展も示した。森田が森田療法を発表する前にもうひとつの課題があった。それは、後者の心理学研究が間違った展開をすることを阻止することであった。これはなかなか手ごわく、迷信の廃絶のようにいかなかった。それが証拠に森田療法は、発表後に必ずしもすぐに受け入れられなかった。森田は当時、「迷信にとらわれる心」に対し、「あくまで事実に基づく科学としてとらえる自然 (純) な心」を根源としたところを森田理論の出発点としたのである。

森田理論は臨済宗、東福寺派の住職であった宇佐玄雄が森田療法を実践することで、さらに禅宗の思想と共鳴しながら成熟していった面も否定できない。偶然にも井上円了は全国巡講の途中に、玄雄の父親である宇佐玄拙のもとに 1910 年 (明治 43 年) に訪れ、「虚空是仏心」という横額を残している。こうして考えると森田療法の誕生には当時の「迷

信と邪教の廃絶」、「科学的自由研究」という明治、大正時代の近代化が後押ししていたという見方もできる。しかし明治維新後の西洋思考偏重のなかで、東洋思想の重要性を主張し不安の病理を追求しようとしたのが森田療法なのである。

2．催眠療法との決別と森田理論、森田療法の完成　（第Ⅳ期：表1）

1917年（大正6年）から1年間、変態心理では、「迷信と妄想」関連に徹していた。しかし、それを終了すると、1919年6月の「神経質の話」を境にテーマが大きく激変したのである。このなかで、犬神の例における憑依状態を、暗示による生理反応として再度を説明しているのが印象的である。この年より、自宅入院治療を開始して、その成果を、「神経質の療法」（成医会前橋）、「精神療法」（成医会上田）、「赤面恐怖について」（成医会総会）、臥褥療法（成医会埼玉）として講演している。それをまとめたのが、森田療法の事実上の誕生となった論文「神経質ノ療法」（成医会雑誌第542号）である。

森田は迷信による「とらわれ」、「暗示」による、その象徴の「犬神」に拘ってきた。森田療法をまとめ、輩出するにあたり、「迷信」と「神経質、精神療法」の論文を交互に発表している。

最終的に、祈祷師との類似性を疑われる「催眠療法」の位置づけを明確にする必要があった。それが1920年（大正9年）：「催眠術療法の価値」（変態心理第6巻第4号）である。この論文では真っ向から催眠療法を非難しているわけではない、「催眠療法は補助的治療法として用いるべきである」としている。これは森田が森田療法に対する自信を窺わせる表現である。以後は、長く催眠療法に熱中していたことに対して遠慮することなく、森田療法の論文を作制していったのである。1920年の「精神療法に対する着眼点について」を経由して、1921年（大正10年）、中村古峡依頼の「神経質及神経衰弱症の療法」が完成した。その

翌年、呉秀三教授在籍25年論文集「神経質の本態及び療法」が世に出ることになったが、同時にやはり、古峡依頼で、「精神療法講義」を発刊した(16)。それは森田療法に固執せず、森田の精神療法に対する総まとめのような余裕の名著である。その昔井上円了が書いた「心理療法」を彷彿させるものがある。少ない参考文献のなかに燦然と「井上圓了、心理療法（明治三十七年)」とある。この論文は大正11年（1922）のことであるので、いかに森田にとって、井上円了の存在が大きかったかが窺い知れる。

第Ⅲ章　考察

1.「迷信・邪教の打破」に対する凄じいまでのエネルギーの意味するもの

1）明治という時代と「神話解放運動」

井上円了が人生をかけて行った「迷信・邪教の打破」へのこだわりは、多くのひとに受け継がれたが、森田正馬と中村古峡のそれに対する活動には凄じいまでのエネルギーがあった。この壮絶なエネルギーの源にはもう一つのエンジンが隠されているように思う。それは伝統的な日本文化から急速に欧米化が進んでいった明治、大正時代のなかに国民が置かれた精神的状況と関連がある。もともと楚人冠らの仏教清教徒同志会による「新仏教」活動は、古来の仏教を重んじ、むやみに欧化政策によって壊される日本文化への回帰を意味していた。同時に彼らの目的は「一切の迷信の打破」を期して近代化、合理性を貫くものでもあった。一見矛盾するような2つの姿勢があったのである。

このあたりを議論するために、Ellenbergerの「神話解放運動」論(17)を用いて考察する。 Ellenbergerにおける宗教病理学では、急激な外来文化が流入した地域においては、従来の固有文化発揚運動が民族運動とし

て出現する事例があることが紹介されている。このような自己文化の危機にあって、過去の自己固有文化を再生しようとする運動を総称して「神話解放運動」と呼んでいる。

Poirierno は 19 世紀末にニューヘブリディーズ島で発生した宗教的民族運動であるカーゴカルト（現代文明の産物を満載した船や飛行機にのって祖先たちがかえってきて、労働の必要がなくなって白人支配から自由になる日がおとずれるという神話に基づく運動）が、メラネシアの諸島で共通にみられた特徴を有する点をとりあげ、その特徴を①外来文化と自己文化の分離　②祖先に対する信頼、③新たな基礎の基での再建、④最大限の解放への激しい熱望、などの抽出を紹介している(18)。Ellenberger はここでの神話解放運動は、民族の同一性の危機にさらされた原住民が再び自己の神話を解放しようとする点において、また無意識の具現化としてポジティブな側面を持つが、一方、その中身においては多分に自己破壊的、非現実的、非社会的内容を内包しているという点でネガティブな側面を持つことを明らかにし、これと類似の運動が各地に多いこと、そしてハイチのヴードゥー教、中国の太平天国など宗教運動の中にその動きが含まれていることを明らかにしている。

Ellenberger はここで現代型の神話解放運動の特徴として、①民族の集合意識、②民族の再生神話の活性化③反文化変容運動（文化変容を拒絶する運動）の 3 点を抽出している。彼はここでこのような運動を出現させるメカニズムについて、「無意識」の機能の一つとして説明する。すなわち無意識には 4 つの機能、①記憶の保存機能　②体験の分離機能　③創造的機能　④神話的再生機能があるというのである。無意識世界に蓄積されるものとして、従来フロイトが抑圧された葛藤が内在化されリビドーが蓄積されるとしたのに、やや異なったニュアンスを加えて解釈している。

2）催眠療法の限界とその放棄

森田は円了の意志を受け継ぎ近代科学によって民衆を呪術的世界から解放、すなわち「迷信・邪教の打破」に没頭した。犬神研究も祈祷性精神症の研究もその成果といえる。しかし民衆は頭で理解しても、その迷信、邪教から解放されることを積極的には望まなかった。その風習を変えようとしなかったのである。その心の背景にあるものは何か。「神話解放運動」の観点で考えると、まず民衆の無意識の心の中に抑圧されている感情として、急速は多文化流入体験に対して、ポジティブな意味での自己固有の文化への回帰の衝動のようなものを感じている。それと同時に神話解放に内包する自己破壊的、非現実的なものを求める無意識の世界を感じることができる。

森田の生育歴の中で前述したが、極彩色の地獄絵図の掛け軸をみて、死の恐怖を体験したことが神経質性格の形成に関与したといわれている。その結果、奇跡、迷信に興味を持ち、骨相、人相、占いに熱中したという。興味深いのは森田が見たかどうかは定かではないが、生家のすぐ側に「絵金」の描いた極めて残虐で奇怪な猟奇的趣味に満ちた屏風絵の存在がある。この屏風絵は、現在年に一度だけ、高知県香南市赤岡町須留田八幡宮の神祭と夏祭りの宵にだけ蔵の中から出され商店街に展示される慣わしで、江戸末期に突然現れた奇妙な習俗である。幕末の混沌とした世相のなかで新時代を築く中心となっていた高知で起きたこのような現象は、一つの「神話解放運動」の現われと考えることもできる。残酷で破壊的、非社会的な現象でありながら、どうしようもなく惹かれていく民衆の心の動きは、科学的な議論、説得など全く力を発揮しなかったのである。彼らの「迷信・邪教の廃絶」運動の最も対象となった福来友吉の超心理学や霊能者「出口なお」によって創始された大本教などにも非現実的なものを求める神話運動のネガティブな側面を感じていたのかもしれない。

当時勃興してきたフロイトの精神分析は無意識世界に注目して出来上がった精神療法である。「神話解放運動」の視点で考えると、無意識世界のなかに不安の原因を求め解決しようとすることは、結果として人の精神の制御力を高める側面と、反対に混乱や自己破壊衝動もまた引き起こしやすい側面がある。

森田が現実に目を向け、しがみついている虚構から事実をありのまま受ける、その「純な心」を取り戻す精神療法を編み出した。まさに「無意識」を扱うことから離れたところに森田療法が成立しているのである。明治以降の近代化の急速な変化の中で民衆が無意識の中に溜め込んでいた不安、不穏なエネルギーが、次第に大きくなりつつあり、その処理方法が求められていた。そのことを感じていた森田が出した一つの答えが森田療法であるということもできるかもしれない。そのためには当時の精神医療の主軸であった催眠療法の放棄との完全決別が必要であった。森田は新しい精神療法を生み出すために、たくさんの準備と段取りを踏んだことになる。それは実に芸術的科学とでも表現したくなる文化的遺産と筆者は考えている。

2．森田療法のなかに生きる井上円了の志―「破邪顕正」

森田は「真理を発見するにはまず虚妄を知り、そのあとで邪を破り、正を発揮する事が出来る」とし、「破邪顕正」を引用している。すなわち、森田は「迷信」から出発し、奇蹟や空想にあこがれ、精神異常を研究、そのうえで異常と正常とのあいだに、病気に似て病気でない神経質を発見した。森田療法の成立過程を集約すると、森田自身の神経質形成と打破、迷信・邪教の廃絶、催眠療法の放棄、森田療法の輩出であるが、こうしてみてくると、森田療法の成立過程自体が、森田理論であり、その神髄であることがわかる。

しかしこのような遠回りとも思える森田理論は、取り返しのつかない

過去でも、予想もつかない、保障のない未来を対象とせず、現在、生きている今を問題にする、さらには目に見えるものを事実として認識するという形で成熟していったのである。その師であったのはまさに井上円了であった。

3．森田療法の発祥地が慈恵医大であったことの意義

森田療法は当時の理論的精神医学界のなか、実践的療法、自然療法であったため、民間療法として認識され、科学的に受け入れらない可能性があった。そのために森田はたくさんの段取りを行なったわけであるが、実際にはなかなか受け入れられなかった。明治以来日本の医学はドイツ医学が主流であった。当時の医学は結核、コレラなど感染学が主導権を持ち、いわゆる学理的、研究至上主義であった。この時代に不安の原因を追及しない森田理論の理解、普及には困難が多かった。

昭和８年に森田は「余の神経質の本態及び療法」の高良の協力のもと独訳した。それを下田光造に送りドイツ医学雑誌に掲載の周旋方を依頼した。下田は当時懇意であったベルリン大学ボーンヘッファ教授の主宰する、Monatschrift fur Psychiatrie に掲載を依頼したが、内容理解困難という謝絶の手紙とともに送り返してきたという。一般には森田療法の直訳されたドイツ語の論文をドイツ人が理解することは不可能であったとされている。しかし筆者は「理解困難は翻訳の問題ではない」と考えている。それはドイツ医学の原因追求型の医学の世界である。特に精神医学では同時期フロイトの考案した精神分析学が主流であった。そのなかにあって『不安の原因を追究せず、不安や症状を排除しようとする計らいをやめ、そのままにしておく態度を養うことを基盤にする、その上で、「事実唯心」と「思想の矛盾」の奥義を極めることであり、そのためには「体得」でしかあり得ない』とした森田理論は、当時のドイツ医学会では到底受け入れられるわけがないのである。フロイトの潜在意識

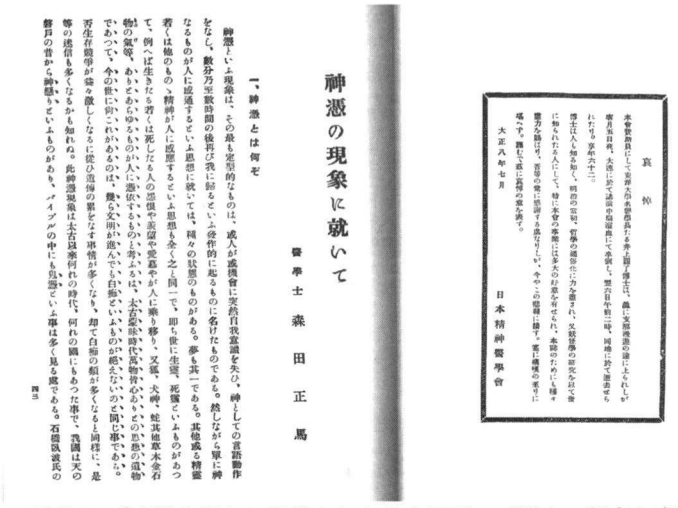
による抑圧、昇華、投影など力動的理論性は森田療法の静的な見方を圧倒していたのである。

当時の日本でも東北大学の丸井清泰は、精神分析の立場で森田療法を批判した。しかし森田が選んだ慈恵医大はイギリス医学を基盤として、高木兼寛が明治14年に創立した私学である。唯一、実学・実践を重んじるイギリス医学を基盤にした大学で、森田療法が完成したことは、とても幸運であった(19)。イギリス医学の出発点は、貧民層の救済、コミュニティによる個人の生活の質の向上にある。慈恵の学祖である高木は当時森田も悩まされた脚気の原因を見出すことはできなかったが、予防することに成功した。ドイツ医学を基盤にする帝大派（森林太郎、青山胤通）は原因を明らかにしないで予防法を受け入れることができなかった。高木も森田もドイツ医学からは受け入れられなかった共通の体験を持っていたのである。もし森田がイギリス医学を基盤にしていない大学に籍を置いていたなら、森田療法は日の目を見なかったかもしれない。

結　語

明治維新後の西洋思考偏重のなか東洋哲学の重要性を主張し心理を追求しようとした井上円了の業績は、当時の心理学、精神医学に多大な影響を与えたと思われる。以前東洋大学の季刊誌に「サティア」があった。これはくしくもサンクリスト語で、「あるがまま」という意味である。一世代、森田より先をいった井上円了の功績は、森田療法の源流を感じさせるのにあまりあるように思う(20)。いずれにしても森田正馬を取り巻いていた当時の人々の業績を通して、森田療法を考えることは、さらに理解をさらに深めるのに有用であると考えられたので、紹介させていただいた。

最期の資料として、中村古峡主催の日本精神医学科会の学会誌である『変態心理』のなかに大正6年、井上円了の逝去の記事があり、それと



命の此の一文は、彼等大本教信者の精神診断に於て、正に一種診断を提供するものであることを、念頭に置いてゐて貰ひたい。（完）

四二

真　悔

本會發起人にして東洋大學本部教員たる井上圓了博士は、曩に笑顔療法による病人が、明治三十年六月十日病、大逝に於て滿腔の熱誠を傾倒し、同地に於て逝去せられたり。享年六十二。

博士は人と知る知る、明治の宗教、哲學の進歩に力を盡され、笑顔療法の研究をも、世に知られたる人にして、特に本會の事業には多大の好意を有せられ、本誌のために、種々盡力を仰ぎ、苦等の衆に感謝する所なりしが、今やその逝去に、もはや、本誌の重要を失ひ、茫然として、唯、冥福を祈るのみ。

大正八年七月

日本精神醫學會

神憑の現象に就いて

醫學士　森田正馬

一、神憑とは何ぞ

神憑といふ現象は、その最も定型的なものは、或人が或機會に突然自我意識を失ひ、神としての言語動作をなし、數分乃至數時間の後再び我に歸るといふ發作的に起るものに名けたものである。然しながら單に神なるものが人に感通するといふ思想に就いては、種々の狀態のものがある。夢も其一である。其他或る精靈者くは他のものゝ精神が人に感應するといふ思想も全く之と同一である。其他或る精靈者くは他のものゝ精神が人に憑依するといふ思想も、即ち世に生靈、死靈といふものがあつて、例へば生きたる若くは死したる人の思慕や、恨や、嫉妬や、怒や、愛慕や、愛惜や、又狐、犬神、蛇其他草木金石等の魂魄が人に憑依するといふ思想も、全く之と同一である。今の世に於てこれがあるかは、難く疑問が濃んでいると白狐がいいかどうかが絶えないのと同じ事である。

芳生存競爭が益々激しくなるに從ひ迷信の累をなす事情が多くなる。即て白狐の船が多くなる。同樣に、是等の迷信も多くなるかも知れぬ。此神憑現象は太古民衆何れの時代、何れの國にもあつた事で、我國は天の磐戸の昔から神懸りといふものがあり、バイブルの中にも見られといふ事は多く見る處である。右德國婦民の

四三

写真７　「変態心理」に記載された井上円了のご逝去の記事と森田の論文

並んで、森田正馬の森田療法の原型となる論文が並んで掲載されたものがあったので提示して本論文を閉じることにする（写真７）。

参考文献

(1)　中山和彦．森田療法の成立に関わった人、井上円了について．日本森田療法学会雑誌，12（2）；165-70,2001.

(2)　中山和彦．森田理論から森田療法へ―中村古峡の果たした役割―．日本森田療法学会雑誌，13（2）；169-77,2002.

(3)　中山和彦．中村古峡について．日本森田療法学会雑誌，14（1）；25-8,2003.

(4)　中山和彦．森田療法の成立に関わった人、佐藤政治について．日本森田療法学会雑誌，13（1）；106-8,2002.

(5)　井上円了：妖怪学講義．井上円了選集 18，学校法人，東洋大学，東京、1999.

(6)　井上円了：心理療法（復刻版）、群書、東京 ,1988.

(7)　板垣聖宣：妖怪博士・井上円了と妖怪学の展開．仮設実験授業研究、第 12 集、仮設社、東京，1977.

(8) 板垣聖宣：井上円了の妖怪学．サティア、第８号；24-6,1992.
(9) 板垣聖宣：かわりだねの科学者たち．仮説社，東京，1987.
(10) 恩田　彰：創造性開発の研究．恒星社厚生閣、東京、1980.
(11) 野村章恒：森田正馬評伝．白揚社．東京，1974.
(12) 井上円了：哲学一夕話．井上円了選集１，学校法人，東洋大学，東京、1999.
(13) 井上円了：心理摘要．井上円了選集９，学校法人，東洋大学，東京、1999.
(14) 中山和彦：森田療法に先立つ「祈祷性精神症」研究の意義．日本森田療法学会誌　19（2）；157-68,2008.
(15) 中山和彦：森田療法を生み出した時代とその背景を探る．臨床精神医学　38（3）；327-34,2009.
(16) 森田正馬．精神療法講義（復刻版）．白揚社、東京、1983 年
(17) Ellenberger HF：The discovery of the Unconscious.Basic Book,New York（1970）（木村敏　中井久夫監訳：無意識の発見．上下巻　弘文堂，東京，1980）
(18) Poirier J:Lesmouvements libe’ ration mythique aux Nouvelles-He,brides.J de la Socie’ te’ des Oceanistes ５：97-103,0949.
(19) 中山和彦．ドイツ医学とイギリス医学の対立が生んだ森田療法．慈恵医大誌　；122（6）：279-94,2007.
(20) 中山和彦：森田療法と井上円了．サティア 第 37 号；34-6,2000.